

岐阜薬科大学同窓会の皆様

日頃より、本学の教育・研究活動に対し多大なるご理解とご支援を賜り、厚く御礼申し上げます。皆様から多くの貴重なご意見をお寄せいただき誠にありがとうございました。統合に対する不安や、「岐阜薬科大学」の名称存続を望むお声、事前説明の不足に対するご指摘を多数いただきました。長年にわたり薬大の歴史と伝統を築いてこられた卒業生の皆様に、多大なご心配とご不安をおかけしましたことを、深くお詫び申し上げます。皆様からいただいた切実な懸念や疑問を真摯に受け止め、以下のとおり、現時点における本学の方針と考え方をご説明いたします。

1. 事前説明の不足と同窓会との連携について

今回の統合構想が、マスコミ報道や知人づてなど、間接的な形で皆様に伝わり、ご心配とご不信をおかけしましたことを、重ねてお詫び申し上げます。

十分に外部へ情報発信できない状況ではございましたが、まずは同窓会参与の方々、各支部の支部長様、学内の在校生、教職員の皆様には、6月から7月にかけて状況をお知らせいたしました。本構想は対外公表前の綿密な制度設計や協議を要する段階があり、また岐阜市議会での審議前ということもあって、公表時期に慎重を期しておりました。正式にお伝えできる段階となった時点で速やかにお伝えしたものの、結果として、同窓生の皆様への迅速な情報提供が十分なものではなかったと痛感しております。

今後は、本部同窓会をはじめ全国の同窓会支部に対しても、ホームページ、総会や支部会などでできるだけ早期に資料と情報を提供してまいります。現在開催中の9月議会においても本件が議題に上がっており、慎重な審議が行われております。いずれにしましても、「大学を支援したい」「全国の同窓会支部も協力できる」とのお申し出を、大変ありがたく、心強く受け止めております。

2. なぜ今、統合・総合大学化が必要なのか

岐阜薬科大学は、創立以来100年近くにわたり、薬学教育・研究への真摯な取り組みと多くの卒業生の活躍によって、全国的にも評価されるブランドと伝統を築いてきました。薬学教育の実績、医療人・薬剤師の育成力、創薬・生命科学研究の蓄積、産学官連携、卒業生のネットワーク、そして地域社会からの信頼は、本学が次の時代にも必ず継承すべき財産です。

一方で、大学を取り巻く環境は大きく変化しています。18歳人口の減少(2040年には18歳人口を含む大学進学世代の人口が大幅に減少することが見込まれていること)に加え、全国的な薬学部志願者の減少、薬剤師需給の変化、医療の高度化、AIやデータサイエンスの急速な発展、創薬研究のデジタル化などが進んでいます。

財務省からも大学の再編・規模適正化が提言されています。

これは、ご懸念いただいている「短大の救済」ではなく、本学が将来にわたり持続的に発展し、地域・社会に不可欠な存在であり続けるための戦略的進化です。岐阜薬科大学がこれまで高い評価を得てきたとしても、その実績だけで今後も選ばれることが保証されているわけではありません。現在の評価に安住すれば、これまで守ってきた伝統やブランドそのものを将来に継承できなくなるのではないかという強い危機感があります。

伝統は、これまでと同じ形を維持するだけでは守れません。時代の変化に対応し、薬学に新たな価値を加えることによってこそ、岐阜薬科大学が築いてきた価値を次の世代へ継承できると考えています。新大学が掲げるビジョン(案)は、「薬学を礎に、未来をデザインする大学」です。

重点戦略の筆頭には「薬学ブランドの再構築」を定めており、薬学部は新大学の中核(コア)として位置付けられます。岐阜薬科大学が培ってきた伝統・歴史・人的ネットワークは、新大学最大の資産として大切に継承・展開してまいります(参照:最終ページ)。

今回の構想は、岐阜薬科大学の伝統を手放すためのものではありません。薬学を新大学の中核に据え、AI・データサイエンス、建築・デザイン、健康科学、グローバル教育などの新たな知見を取り込み、薬学教育と研究の可能性を広げるための構想です。異なる分野との共創によって新たな価値を生み出し、次の100年に向けて発展するという考えを込めています。

3. 岐阜市立女子短期大学との統合について

現在検討されている構想は、岐阜市立女子短期大学を現在の形のまま残すものではありません。岐阜市立女子短期大学は、2028年度に廃止予定です。岐阜薬科大学が培ってきた薬学教育・研究の伝統と実績を継承するとともに、岐阜市立女子短期大学が培ってきた教育資産のうち、新大学の教育・研究に生かせる分野を発展的に取り込み、薬学部と新たな理系学部からなる一つの4年制大学へ移行する方向で検討が進められています。

新学部では、AI・情報科学・データサイエンス、建築・デザインなどを中心とした教育を構想しています。また、岐阜市立女子短期大学が培ってきた食・栄養、建築・デザイン、グローバルコミュニケーションなどの教育資産についても、新大学全体の教育に生かすことを検討しています。

ただし、二つの大学を形式的に一つにするだけでは、統合の意義は生まれません。薬学部と新学部がそれぞれの専門性を維持しながら、教育、研究、社会貢献の具体的な場面で連携することが必要です。例えば、次のような領域が考えられます。

- ・AI やデータサイエンスを活用した創薬研究、医療データ解析
- ・建築・デザインと薬学を組み合わせた健康都市、住環境、防災
- ・食、栄養、予防、未病、健康、美容に関する教育・研究
- ・医薬品やヘルスケア分野における起業家教育と社会実装
- ・グローバルな教育、研究および人材交流

こうした連携を具体化し、薬学部単独では十分に展開しにくかった教育・研究領域を広げることによって、薬学部自体の価値を高めることを目指します。

一方で、「少子化の中で新学部に必要な志願者を確保できるのか」「統合が本当に薬学部の強化につながるのか」というご懸念は、当然のものであると受け止めています。統合そのものを目的とするのではなく、統合によって薬学部の教育・研究力が実際に高まり、優秀な学生から選ばれ続ける大学になることを、構想の成否を判断する重要な基準といたします。

4. 薬学部の入学定員、入試水準、教育・研究、就職実績について

新たな大学への移行によって、薬学部の入学定員、入試水準、教育・研究力、就職実績が低下することを心配されるご意見をいただいています。大学としても、これらは極めて重要な課題であると認識しています。薬学部の強みを守り、さらに発展させることが、今回の構想を進めるうえでの基本的な条件です。薬学部の入学定員については、大学として現行水準の維持を基本的な考え方として、今後の制度設計の中で岐阜市とも協議してまいります。

薬学部を新大学の中核と位置付ける以上、理念を掲げるだけでなく、教員体制、教育・研究予算、施設及び学生支援を具体的に確保しなければなりません。新学部との連携についても、「融合」という言葉だけで終わらせず、どのような教育プログラムや研究拠点をつくり、学生にどのような能力を身に付けさせるのかを明確にします。

大学としては、AI・データサイエンスを活用した創薬や医療、生命科学、社会薬学、予防・未病などを重点領域として検討しています。こうした新たな価値を加えることによって、岐阜薬科大学が薬学教育・研究を先導する大学であり続けることを目指します。

将来の入学者数についても、2040 年に向けて 18 歳人口が大幅に減少することや、昨今の薬学の人気動向を勘案し、私立大学を中心に薬学部の廃止や定員削減が進んでいる現状があります。また、医師や看護師をはじめ、薬剤師の数についても需給バランスに関する課題が指摘されており、財務省からも薬剤師の需給についての指摘が出ております。以上のことを考慮し、本学では地方会場での入試を導入いたしました。昨年度は福岡市(博多

駅近く)、今年度からは福岡市とさいたま市の 2 会場で実施するなど、入試制度の改革にも取り組んでおります。

今後は 18 歳人口だけを対象にするのではなく、社会人の学び直し、地域企業との共同教育、医療・福祉分野の人材育成、地域課題を対象とした研究など、大学の役割そのものを広げていく必要があると考えております。

5. 「岐阜薬科大学」の名称、伝統、ブランドについて

約 100 年にわたって受け継がれてきた「岐阜薬科大学」という名称は、同窓生、在学生、教職員にとって大切な財産です。また、その名称は、教育・研究の実績や卒業生の活躍によって築かれた社会的な信頼を表すブランドでもあります。昨年 4 月からは、岐阜市公立大学法人岐阜薬科大学として新たなスタートを切りました。

2029 年度から岐阜薬科大学が名称変更となることについて、強い喪失感や不安を感じられることは十分理解しております。現時点では、新大学の名称として「岐阜市立大学」が案として示されていますが、大学名称、学部名称、沿革上の位置付け、証明書等への表記、同窓会名称などの具体的な取扱いについては、確定している事項と検討中の事項を区別してご説明してまいります。

大学名称が変更される場合であっても、岐阜薬科大学の歴史、教育・研究実績、卒業生ネットワークが途切れることはあってはなりません。岐阜薬科大学の歴史を新大学の正史として位置付けること、薬学部の名称や広報において岐阜薬科大学との連続性を明示すること、同窓会の名称と活動を尊重することなど、ブランドを具体的に継承する方法を検討してまいります。なお、現時点の案ではございますが、岐阜薬科大学の校歌(作詞:北原白秋、作曲:山田耕筰)は、歴史と伝統を象徴する大切な資産であることから、大学としては岐阜市立大学の校歌としても継承したいと考えております。

6. 理事長・学長の関与について

岐阜市が公表した準備委員会の資料において、理事長・学長が委員ではなくオブザーバーとして記載されていることから、「岐阜薬科大学の意向が十分に反映されていないのではないか」とのご指摘をいただきました。

公立大学は、設置団体である県や市との関係が非常に重要であり、大学の将来構想についても、設置団体との十分な協議・連携のもとで検討を進める必要があります。今回の構想につきましても、岐阜市と本学の間で十分に議論を重ね、岐阜市長からのご要望も踏まえながら、さまざまな課題について協議を尽くした上で導き出した結論でございます。したがって、本構想は本学が一方的に決定したのではなく、設置団体である岐阜市と本学が将

来を見据えて十分に協議を重ねた結果として進められているものであることを、何卒ご理解いただきたいと存じます。

そもそも、2021 年より岐阜市立女子短期大学の将来に関する在り方懇談会、将来構想委員会、準備委員会などが開催されてきましたが、その期間、本学はまだ法人化されておらず、委員に選ばれなかったのはそのためでございます。本学は 2025 年 4 月から法人化されましたので、その後の会議には法人化の時期が途中であったこともあり、オブザーバーとして参加しております。

その後は、オブザーバーの立場でありながらも、その都度、意見を求められ、岐阜薬科大学の意向や伝統、薬学分野の強みが新大学構想に十分に反映されるよう、法人理事長および学長の立場で主体的かつ精力的に協議を行っております。今後も、大学として重視する事項を岐阜市との協議の中で丁寧に伝え、構想に反映されるよう努めてまいります。事前相談が不足していた点につきましては、今後はできる範囲内で、各支部の同窓会開催の際や本学同窓会ホームページ等を通じて、同窓生の皆様への丁寧な説明に努めてまいります。

7. キャンパス、寄付、同窓会の今後について

・**キャンパスについて**:薬学部については、2029 年度からの新キャンパスの供用開始に向けて準備を進めています。新学部については、2029 年度の開設時には三田洞キャンパスを活用し、その後のキャンパス整備について岐阜市と検討を進めています。教育・研究施設だけでなく、運動場や体育館を含む課外活動施設についても、学生生活に支障が生じないよう、具体的な整備方針を示す必要があると認識しています。

・**寄付金について**:法人への寄付要請において「どの大学か分からない」とのご意見をいただきました。寄付金の使途につきましては、薬学部の教育・研究推進や学生支援に直接活用される「薬学部限定寄付」の枠組みを明確にし、同窓生の皆様の思いが確実に薬学部へ還元される仕組みにしていまいります。

・**同窓会の組織形態について**:統合後も岐阜薬科大学同窓会としての独自の絆や歴史、ネットワークが存続・強化できるよう、学部ごとに活動する方針で進めたいと思います。大学としても全力で支援してまいります。現在の岐阜薬科大学同窓会誌「九重」をはじめ、同窓会の名称、組織、活動等については、同窓会において今後ご検討いただく事項であると認識しております。大学としては、岐阜薬科大学同窓会の歴史と独自性を尊重し、その活動が円滑に継続されるよう必要な支援を行ってまいります。

おわりに

岐阜薬科大学が約 100 年かけて築いてきたブランドと伝統は、次の時代にも継承すべき大切な財産です。しかし、薬学部を取り巻く環境が大きく変化する中、これまでと同じ形を維持するだけで、その価値を将来にわたって守れるとは考えていません。時代に合わせて変えるべきものを変え、薬学に新たな価値を加えることによって、守るべき伝統を次の世代へ継承したいと考えております。

そのため、新大学では薬学部を中核に位置付け、岐阜薬科大学が培ってきた教育・研究力、卒業生ネットワーク、地域からの信頼を大学全体の基盤とします。そのうえで、データサイエンス、建築・デザイン、健康科学などとの共創を進め、創薬、医療、健康、地域社会の課題に応える新たな教育・研究を展開してまいります。

一方で、「将来のため」という理念だけで同窓生の皆様にご理解を求めることはできません。薬学部の入学定員、入試水準、教員体制、教育・研究予算、薬剤師国家試験、就職実績、大学名称及び歴史の継承について、その都度、皆様にご説明・ご提示してまいりたいと考えております。

本学が目指すのは、岐阜薬科大学の歴史を終わらせることではありません。約 100 年にわたって築かれた薬学の伝統を礎として、新たな知と人材を結び付け、次の 100 年においても社会から選ばれ、同窓生の皆様に誇りを持っていただける大学へと発展させることです。今後も同窓生の皆様との対話を重ねながら、「継承」「共創」「飛躍」の理念のもと、岐阜薬科大学の強みを守り、さらに高める大学づくりに取り組んでまいります。

2026 年 9 月 24 日

同窓会名誉会長

岐阜市公立大学法人理事長

岐阜薬科大学長 原 英彰

同窓会会長

齋藤 貴夫

同窓会幹事長

岐阜薬科大学副学長

実践薬学研究推進センター長 吉村 知哲

下記に(仮称)岐阜市立大学のビジョン及び経営方針案をご提示いたしますが、現在はいくまでたたき台であり、今後変更される可能性があることをご承知おきください。

2026年9月時点

岐阜市立大学（仮称）ビジョンと経営方針（たたき台）

ー 薬学を礎に、未来をデザインする大学 ー

岐阜から世界へ、地域とともに発展する特色ある公立理系大学へ

